

### 英語圏における『土佐日記』受容史の概略 (戦後編) : 国文学と日本研究

ONO, Robert / 大野, ロベルト

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Intercultural Communication : Ibunka / 異文化

(巻 / Volume)

24

(開始ページ / Start Page)

71

(終了ページ / End Page)

88

(発行年 / Year)

2023-04-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00026263>

# 英語圏における『土佐日記』受容史の概略（戦後編）

——国文学と日本研究——

## 大野ロベルト

ONO Robert

### 1 はじめに

大戦期において、日本は英米の、すなわち英語圏にとっての敵国であった。その後、降伏した日本とどのように関係を再構築すべきかという課題は、当然ながらあらゆる利害が交錯する複雑な様相を呈したが、そこでは学問のあり方もまた重要な一側面であった。戦勝国の視点に立つならば、とくに歴史や思想のように、いわゆる国民感情に直結する研究領域をないがしろにすることは、直前までの経緯を鑑みて危険ですらあったのである。

明治維新を機に諸についたジャパノロジーでは従来、日本国内ですでに蓄積されていた研究成果のうえに、西洋の論者によって新しい理論が組み立てられることも多かった。それは日本が開国してまだ日が浅かったことや、言語的な障壁も大きかったことを思えば、無理からぬことである。しかし二次資料に頼らざるを得ないそのような方法では、研究手法のみならず、その背景にある思想をも、半ば無批判に踏襲することになりかねない。現に、戦後すぐに問題として指摘されたのは、多分にマルクス主義的であった戦前日本の歴史解釈が、すでに西洋の日本研究にも大きな影響を与えてしまっているという点であった<sup>[1]</sup>。

要するに、戦争によって、日本研究はふりだしに戻ったのである。しかし戦争による日本研究の断絶を、必ずしも負の遺産と捉える必要はない。回顧的には、むしろそのような断絶こそが、日本研究再生の起爆剤であったとも言えるからである。本稿ではこのことを踏まえたうえで、前稿に引き続き<sup>[2]</sup>、戦後の英語圏における『土佐日記』の英訳ならびに研究を通じての受容を概観したい。

### 2 ジャパノロジー新章へ

戦前に実践された日本研究はあくまで外国人によるものであり、それは日本国内の研究者には何ほどの影響も与えなかった——漠然とそのように考える向きも多いのではないだろうか。だが実際には、明治の新世代の研究者たちは、自国の研究者による成果と徒らに区別す

ることなく、外国人による研究成果にも強い関心を払っていたのである。

例えば、国文学者で歌人の佐佐木信綱（1872-1963）にとって、イギリスの言語学者であり、日本アジア協会などで活動したバジル・ホール・チェンバレン（Basil Hall Chamberlain, 1850-1935）は、父である佐佐木弘綱（1828-1891）、師である木村正辞（1827-1913）と並んで、「生涯の三恩師」と呼ぶほどに重要な存在であった<sup>[3]</sup>。また、早稲田大学で教鞭をとった国文学者の永井一孝（1868-1958）は自著『国文学史』（1905）のなかで、この領域を学ぶ者に推薦する一冊としてW・G・アストン（William Geroge Aston, 1841-1911）の『日本文学史』を挙げている<sup>[4]</sup>。チェンバレンと同じくアジア協会の一員であるアストンは、前稿で詳しく見たとおり、講演“An Ancient Japanese Classic”（1875）によって初めて『土佐日記』の存在を英語圏に知らしめた人物でもある<sup>[5]</sup>。

著者は此の書の外にも嘗て『日本書紀』の翻訳及び我が『俗語法』を著はしたることありて日本学者として西欧に名を得たる人なり。例証として挙げたる国文の英訳甚だしく原文の意を誤れるもの少く又我が邦人の思ひよらざりし奇警なる観察さへ少からず。若し本書の欠点を云はゞ江戸文学並に東京文学の観察如何にもみすばらしきにあり。さはれ一外国人によりて著はされたる此の書は我ががあらゆる国文学史中にて一争ふべき価値あるを覚ゆ。<sup>[6]</sup>

永井によるこの一節は、当時の日本の文学者の姿勢を検討するうえで重要であろう。優れた研究であれば、彼らはそれが外国人（当時すでに「日本学者」という呼称があったことも注目に値しよう）によるものであっても素直に評価し、そこから学ぼうとしたのである。

このような姿勢が永井に独特のものでなかったことは、同時代人である藤岡作太郎（1870-1910）の場合を見てもわかる。ドイツ流の文献学的手法を学び、近代国文学の基礎を築いたとされる芳賀矢一（1867-1927）の欠員を埋めるため東京帝国大学に招聘され助教授となった藤岡は、早世したこともあり今日ではあまり存在感を持たないが、多岐にわたる業績は当時いずれも高い評価を得ている。第三高等学校の教授時代には国語のほか英語も教え、『近世絵画史』（1903）という美術書の著作もある。同書の「諸言」には、藤岡の飾らぬ心情がにじんでいて興味深い。

芸術の方面より国民思想の展開、社会文化の発達を説きたるものは、極めて稀なり、蓋し芸術にたづさはるものは文筆に疎く、文筆に携わるものはまた芸術に暗ければなり。余もとより絵画の批評については深く得るところあるなし、されど性来好むところとて、古今の画跡を觀、従うてそが変遷の歴史を知らんとして（後略）<sup>[7]</sup>

このように専門性に過剰にこだわることなく、自らの嗜好を矯めることのない学際的な姿

勢を体現した藤岡は、引用文からも窺えるように、芸術や文学、それに風俗などを幅広く研究することで、「国民思想の展開」を可視化することを企図したのである。それは言ってみれば、リベラル・アーツの考え方を先取りしたものということになるろう。

ところで「国民思想」といえば、全四巻になる津田左右吉（1873-1961）の『文学に現はれたる我が国民思想の研究』（1917-1921）がよく知られている。実は、生前は未発表に終わったものの、藤岡はこれと驚くほど似た題をもつ「我国の文芸に現はれたる国民思想の変遷」という文章を残しているのである。大まかに言えば、それは外部からの大きな影響にさらされ続けた日本が、とくに平安時代や江戸時代においてその影響を礎として日本固有の文化思想を発展させた、という見取り図を描くもので、「外来思想と国民に固有の思想との関係を史的展開の中でとらえ」るものである<sup>[8]</sup>。

言い換えれば藤岡は、日本が海外の文化思想から影響を受けることを自明の前提とし、日本独自の文化思想がそのうえに立脚していると考えることに抵抗を感じなかったということになるろう。そうであるならば、その影響の源が中国大陸や朝鮮半島にとどまらず、西欧諸国にあったとしても大きな違いはないはずである。藤岡や、それに永井は、自分たちの所属する、大学を頂点とする新たな教育研究のあり方や、それぞれの学問領域における研究手法が、いずれも西洋から流入したものに多くを負っているという事情も、当然ながら熟知していた。文学のように長い伝統を持ち、民族性やアイデンティティの問題とも必然的に関わってくる領域を研究する学者たちがそのような柔軟性を持ち得たのは、そうしなければ新世代の文学者である自分たちの存在を肯定できなかつたということでもあろう。その背景にはまた、何事につけ変革に寛容で、豪放磊落なところのあった明治日本の気風もあったものと思われる。

だが大正時代以降、学界はかえって排他的な色合いを強めるようになる。軍国主義が隆盛するなかで「国民思想」の意味合いも変化し、それは西欧諸国に対抗するアジアの大国としての自国意識を指すようになる。本来的には政治と距離を置く領域であるはずの文学も、その変化から完全に自由でいることは不可能であった。例えば、俳句を主な研究対象とし、それまで政治とは無縁であった国文学者の沼波瓊音（1877-1927）のような人物でさえ、日本文壇の今後について「日本の文芸・文化ひいては国民意識総体における外国への隷従、精神的亡国の兆候について深刻な憂慮」を表明せざるを得なくなるのである<sup>[9]</sup>。こうしていわゆる「ナショナリズム」にがんじがらめにされていった国文学は、戦後の再出発までの期間、かつての学際性を翳らせることになる。

しかしこの暗黒時代はまた、その後の日本研究への助走期間でもあったのである。例えばドナルド・キーン（Donald Keene, 1922-2019）は 18 歳のとき、アーサー・ウェイリー（Arthur Waley, 1889-1966）訳の『源氏物語』と出会っている。これにより日本文化に抜き難い関心を抱き、日本語の勉強を始めた翌年、アメリカと日本は交戦状態となる。キーンは海軍の日本語学校に入学し、そこで身につけた高度な日本語能力を生かし、翻訳や通訳の業務に従事した<sup>[10]</sup>。少なくとも文化的には好意を抱いている外国と自国とが敵同士になることは、逆説的

に相手国への関心をさらに深めるという結果をもたらす。敵国、敵性言語の研究として深められた日本、日本語への知識が、戦争さえ終われば、爾後の日本研究のための基礎体力となることも、キーンには容易に想像できただろう。

キーンの体験は、同世代の日本研究者としては典型的なものと言える。キーンと双璧をなすジャパノロジストとして名前の挙がることの多いエドワード・サイデンステッカー (Edward Seidensticker, 1921-2007) や、後段で取り上げるマッカラム、やはり戦時中に日本を「研究対象」としていたのである。彼らを育てた日本語学校は、戦後には日本研究の拠点となってゆく。米国内で初めて持続的な日本語研究プログラムを展開したミシガン大学では、終戦の時点で1,500名もの兵士が日本語を扱う訓練を受けていたが、このプログラムを母体として、ミシガン大学には全米初となる国立の日本研究センターが創設されたのである<sup>[11]</sup>。

もちろん戦後の日本研究においては日本人も重要な役割を担っている。わかりやすい例としてはいわゆる「箱根会議」が挙げられよう。アジア学会および近代日本研究会議による「日本の近代化にかんする共同研究の予備会議」は、前述のミシガン大学に所属する研究者たちによって立案され、フォード財団からの資金を得て、1961年から5カ年計画で実施される予定であった。その準備段階として開催されたのが「箱根会議」である<sup>[12]</sup>。1960年の8月29日から9月2日にかけて箱根の旅館で一堂に会したのは、半分がアメリカ及びカナダ、もう半分が日本出身の、合計30名の日本研究者である。その後も開催され全8回に及ぶことになる会議は、日本を「理解」するためにはどのような思想を抛り所とし、どのような方針を打ち出すべきかを論ずるものであり、エドウィン・ライシャワー (Edwin O. Reischauer, 1910-1990)、ジョン・ホール (John W. Hall, 1916-1997)、そしてキーンらが、丸山眞男 (1914-1996)、加藤周一 (1919-2008)、高坂正顕 (1900-1969) らと膝を寄せ合った。いまに続く戦後「日本研究」の出発点である<sup>[13]</sup>。

以上、きわめて雑駁ながら、前稿で取り上げたフローラ・ベスト・ハリス (Flora Best Harris, 1850-1909) やアストンが活動した時期とは一線を画する、戦後の日本研究が成立するまでの事情を検討した。以下に整理する戦後の英訳『土佐日記』が、かかる文脈のうえに登場したものであることは、多かれ少なかれ意識すべきであろう。

### 3 サージェントによる「平易」な訳

ウィリアム・N・ポーター (William N. Porter, 1849-1929) による『土佐日記』の英訳、*The Tosa Diary* が1912年に刊行され<sup>[14]</sup>、今日でも最も手に取りやすい版であり続けていることは、前稿で記した通りである。その後、新たな英訳が出るまでには長い年月を要した。そして1955年、ようやく登場した戦後初の新訳は、一連の英訳『土佐日記』では唯一となる抄訳であった<sup>[15]</sup>。

そのG・W・サージェント (Geoffrey W. Sargent, 1923-1976) による“Tosa Diary”は、何か深い意図があって本文が割愛されたというよりも、純粋に紙数の要請に合わせての選択で

あったとみるべきである。それが収められたキーン編纂の *Anthology of Japanese Literature* (日本文学選集) は、古代・平安・鎌倉・室町・徳川と分けられた各時代から代表的な詩歌や物語、謡曲、戯作を集めた網羅的な選集でありながら全体で 400 頁余と簡潔であるため、各編はもっぱら抄訳となっている<sup>[16]</sup>。抄訳に含まれる箇所は、そのまま『土佐日記』の本質を伝える勘所として選ばれたものと仮定してみることもできようが、注意を要するのは、訳出箇所の選定を行ったのがサージェント本人であるのか、それともキーンや出版社の編集者などであったのかが不明という事実である。

内容に触れるまえに、訳者の経歴を簡単に整理しておきたい。英国プリマスに生まれたサージェントは、ケンブリッジ大学で西洋古典を学びながら陸軍の諜報機関で働き、そこで日本語を学んだ。これを機に専門を日本の古典、とくに井原西鶴に切り替え、1950 年代には高知大学や甲南大学で客員教授を務めている。その後、オーストラリアへ移住し、シドニー大学で教鞭をとりながら、同地の東洋研究を牽引したようである<sup>[17]</sup>。専門の西鶴では『日本永代蔵』の翻訳があるが<sup>[18]</sup>、ほかに田山花袋「一兵卒」、菊池寛「恩讐の彼方に」、そして三島由紀夫「憂国」など近代小説の翻訳もある。

それでは、サージェントによる『土佐日記』抄訳の採用箇所を確認しよう。まず日付を羅列すると、抄訳に含まれているのは十二月が二十一日から二十七日、一月が九日、十日、十七日、二十一日から二十三日、二十六日、三十日、そして二月が四日、五日、十一日、十六日である。原文では十二月二十一日から二月十六日まで、55 日分の記事が途切れることなく続くが、これに対して抄訳に含まれるのは 19 日分に過ぎない。

もっとも、収録されていない日の出来事が、なかったことになっているわけではない。例えば、最初の断絶である十二月二十七日から一月九日までの空白には、以下のような補足説明が挿入されている。

Proceeding eastward from Urado along the Pacific coast of Shikoku, they reach a harbor called Ōminato the following night. Here they are detained for nine days, waiting for clear weather. After a disappointing New Year's Day, which only serves to increase their general yearning for Kyoto, they occupy themselves in receiving visitors and composing poems.<sup>[19]</sup>

浦戸から四国の太平洋沿岸を東進する一行は翌日夜、大湊という港に到着する。ここで一行は快晴を待ち、九日間の足止めにあう。京への郷愁を強めるだけの結果に終わった、落胆を誘う元日を経て、一行は客を迎えたり、詩を作ったりして過ごす。  
(拙訳、以下同)

事実、上記の期間には旅程が停滞し、原文の日記には「三日、同じ所なり。もし風浪のし

ばしと惜む心やあらむ、心もとなし」のように、短い記事が目立つ<sup>[20]</sup>。省略されている記事のすべてに当てはまるわけではないものの、「土佐から京への船旅」という『土佐日記』の軸からやや離れた、いわば動きの少ない記事が、省略される傾向にあることは明らかである。しかし動きの少ない記事が重要でないかと言えば、むろんそうではない。例えば、「羽根」という地名を面白がる子供の言葉に囚らずも焦燥感を煽られる場面（一月十一日）や、自分たちの旅中の孤独を、かつて遣唐使として外国で過ごした阿倍仲麻呂のそれになぞらえる場面（一月二十日）、あるいは在原業平ゆかりの地を目にしたことをきっかけに、亡くなった子供を想起し悲しみに沈む場面（二月九日）など、作歌行為を様々な角度から取り上げて言葉と心の関係に迫ろうとする『土佐日記』の本質的な主題に照らして、ぜひ訳出したほうがよいと思われる記事も、しばしば省略されてしまっているのである。だがいま列挙したような記事が、注釈や解説を抜きにしては外国の読者に伝わりにくいものであることもまた明らかであり、基本的に各テキストの冒頭に加えられた半頁ほどの解説のほかには注釈を加えないという *Anthology of Japanese Literature* の編集方針と考え合わせれば、省略は仕方のないことであると思われる。

さらに、抄訳に含まれる記事についても、すべてが完全な形で訳出されているわけではないことを、付け加えておく必要があるだろう。具体的に言えば、一月十七日、一月二十一日、一月二十六日、二月五日の記事では、一行は移動しながら複数の歌を詠み、その内容に心理的な影響を受けながら旅を続けるのであるが、抄訳ではいずれも歌は一首のみ取り上げられており、記事の後半部分が割愛されている。ここでも、一行がある地点から別の地点へと物理的に移動した、という事実のほうが重視されており、歌の弁証法とでもいうべき抽象的な部分は軽んじられているわけである。

最後に、重大な誤謬についても指摘しておきたい。というのはサージェント訳では、十二月は *twelfth moon* と訳されているにもかかわらず、一月は *second moon*、二月は *third moon* となっており、整合性がないのである。整合性というのは、もし十二月が *first moon* となっていたなら、あるいは旧暦を英語圏の読者に親しみやすいグレゴリオ歴に近づけるための処理と考えられなくもないからである。ただ、実際にグレゴリオ暦を採用しているポーター訳では、当然のことながら日のほうも厳密に新暦に変換されており、サージェントのように月だけを変換するというのはあり得ない。ひょっとすると、サージェントは抄訳を行うに当たってポーター訳を参照し、日付に関しても部分的に引き写してしまったのだろうか。そして推敲の段階で日付を原文と突き合わせることを怠ったために、誤りが訂正されぬまま活字になってしまったということなのかもしれない。

このように書くと、サージェント訳が全体として完成度の低いものであるという印象を与えてしまうかもしれないが、それは本稿の意図するところではない。サージェントの訳文の特徴を挙げるとすれば、平易であるということに尽きるだろう。ただしこの場合の平易というのは、文章が易しいということではなく、異文化の読者にとって、内容の理解がしやすい

ということである。例えば冒頭、十二月二十一日の記事にはこうある。

Late at night we made our departure from the house.<sup>[21]</sup>

原文は「戌の時に門出す」であり、前稿で取り上げたハリスやポーター訳に加え、後段で取り上げるマッカラ訳でも、ここは“Hour of the Dog”と直訳したうえで注をつけ、午後八時頃のこと、と説明している。例外は同じく後段で取り上げるマイナー訳で、該当箇所は“about eight at night”となっており<sup>[22]</sup>、直截にその意味するところが記されている。それに対してサージェント訳は「夜遅くに我々は屋敷を出発した」であり、厳密な時刻よりも、それが「夜遅く」であるという登場人物たちの感覚を優先し、具体的な説明を一切加えない方針を採っている。

また、その直後、二十二日の記事にある「船路なれど馬のはなむけす」という表現についても同様のことが言えよう。これは言うまでもなく旅の安全祈願の儀式であるが、船旅であり、馬を用いない道行きであるのに「馬のはなむけ」をする、というところに諧謔がある。とはいえ軽率な冗談として片付けてよい場面ではなく、『土佐日記』が船旅を描いた前例のない物語であると同時に、言葉の意味やその解釈可能性を掘り下げることにより重きが置かれたテキストであることを宣言しているという意味では、かなり重要な箇所と言ってよいのである。ところが、ハリスが“Uma no hanamuke”と原語を記し<sup>[23]</sup>、ポーターが“turn his horse's head”<sup>[24]</sup>、マイナーが“something for the horse”<sup>[25]</sup>、マッカラが“pointed the horse's nose”と<sup>[26]</sup>、いずれも馬を登場させ、さらに注で補足しているのに対して、サージェントは該当箇所を“a farewell celebration ‘for the road’ (not very appropriate for a ship, perhaps)”と訳出しているのである<sup>[27]</sup>。つまり、「馬のはなむけ」という句は登場させず、「道中」の安全を祈ることが「船旅にはあまりふさわしくない」という、読解の過程を先回りするような訳し方を選んでいるわけである。

このような例はサージェント訳において枚挙にいとまがなく、人名などの固有名詞のほかは、言葉遊びなどに関しても極力英語に置き換えられている。繰り返しになるが、そもそも文中には注釈が一つもない。これは英語圏の読者にとっては、それだけ引っ掛かりを感じることのすくない、円滑に読み進めることのできる本文である、ということの意味する。

最後にいまひとつ、象徴的な例を挙げよう。浜辺で酒に酔った者が、文盲であるにもかかわらず無意識に足で文字を書くという、十二月二十四日の記事にある場面である。

ありとある上、下、童まで酔ひしれて、一文字をだに知らぬ者、しが足は十文字に踏みてぞ遊ぶ。

以下、各訳者による該当箇所を抜き書きし、それをさらに和訳してみる。



[...] and danced all the ship' s company, down to the children, plied the wine cup so freely that they marched and danced about in their intoxication, even that ignorant of a single character, describing the character ten ( + ) with their staggering feet! <sup>[28]</sup>

そして船の乗組員たちは踊り、子供に至るまで酒の杯を思うさま重ねると、酔いに任せて歩き回り、跳ね回ったので、一文字も知らぬ者も、ふらつく足で十の字を描いたのである！ (ハリス訳)

[...] and accordingly everybody, high and low, even the very boys, got so intoxicated, that those who did not know how to write one word found that their feet had playfully trodden the word 'ten' in the sand. <sup>[29]</sup>

それを受けて全員が、身分の高い者も低い者も、ほんの少年に過ぎない者たちもひどく酔っ払ったので、単語の一つも書けない者たちまで、砂の上でふざけるうちに足で「十」という語をなぞっていたのである。 (ポーター訳)

The people present—high and low, without distinction, even the young—drank a great deal, and in the general carousing those who could not even write a simple line were staggering crosses with their footprints. <sup>[30]</sup>

その場の人々は—身分の上下に関係なく、また若者も—大量に酒を飲み、どんちゃん騒ぎをするうちに、線を引くことさえまともにできない者たちも、ふらふらする足跡で十字を描いていたのである。 (マイナー訳)

Everyone got staggering drunk—the high, the low, the very children. People who did not even know the character “one” wrote “ten” with their feet. <sup>[31]</sup>

誰もがふらふらになるまで酔った—身分の高い者も低い者も、ほんの子供まで。「一」という文字が書けない者たちまで、足で「十」の字を書いた。 (マッカー訳)

いずれの訳も、多少の異同はあれ、ほぼ同様の内容を伝えていることは一目瞭然であろう<sup>[32]</sup>。さらに訳文だけでは不十分という判断から、ハリス訳は本文中に括弧で「十」という漢字を示し読者の想像を助けているし、あとの訳者も注をつけ、「一」と「十」という漢字の姿を

説明している<sup>[33]</sup>。ところが、サージェントの訳は以下のようなものである。

Every one, high and low, old and young, was fuddled with drink. Even people who have never learned to write the figure one were merrily dancing figures of eight.<sup>[34]</sup>

身分の高い者も低い者も、老人も若者も、全員が泥酔するまで飲んだ。一という文字の書き方を学んだことのない者まで、楽しそうに八の字を踊っていた。

(サージェント訳)

一読して明らかなように、ここでは「十」が「八」に変わっている。もちろん訳文は one と eight であることから、読者は「1」と「8」という形を思い浮かべることになる。縦線を引くだけの文字は書けないが、踊るうちに足が二つ連なった円を描いてしまう、という状況は容易に想像がつく。あるいは、西洋のダンスの基本的なステップであるジャズ・スクエアなどを連想するであろう。その軌跡は限りなく「8」に近い。このようにサージェント訳は、原文への歩み寄りを限定し、注釈を排して、原文の意味するところを、英語圏の読者の属する文化の文脈に移植することに、ある程度まで成功しているのである。

サージェントのこのような原文との向き合い方は、最も著名な日本古典の翻訳と言ってもよい、アーサー・ウェイリーによる『源氏物語』を思い起こさせる。そもそも中国語の専門家として出発したウェイリーは、あくまでも文学者ではなく言語学者であり、『源氏物語』の翻訳に際しても、言葉の細かなニュアンスやその背景にある日本文化の機微を伝えることにさして関心を持たなかった<sup>[35]</sup>。ウェイリーが外国に紹介したいと願ったのは、あくまで重層的かつ心理的な、欧米の作品との比較にも耐えうるプロットのほうだったからである。その結果、出来上がった翻訳はもはや「イギリス文学」と言っても差し支えないものであったが、英語圏の読者が抵抗なく読めるものであったからこそ、この『源氏物語』はヴァージニア・ウルフなど同時代の海外の作家にも少なからぬ影響を与えることになったのであろう<sup>[36]</sup>。

翻訳をめぐるこのような議論は、日本国内における現代語訳についても再考を促すだろう。現代の読者にとって、原文のみで古典を読解することは難しいことであり、現代語訳か、少なくとも何らかの注釈を添えた本文に触れるのが普通である。したがって古典を読むということは、そのテキストが書かれた時点から現代に至るまでに蓄積されてきた解釈の歴史に触れることでもあるのだ。とくに『源氏物語』のように読者の多い作品では解釈も幅広く、研究者ではない作家による現代語訳だけを見ても、与謝野晶子、谷崎潤一郎、円地文子、あるいはさらに柔軟な瀬戸内寂聴、林望、橋本治、角田光代らによる訳がある。そして、これらの新しい本文に触れた読者が受ける様々な印象は、古典の英訳に触れた海外の読者の受ける印象と、意外なほど平行なのではないかと思われるのである。本格的に古典を学ぼうとするのであれば注釈付きの古典本文か、せめてすでに評価の定着している現代語訳を手にと

るべきであろうが、あくまで楽しみながら物語の内容を把握したいだけであれば最新の訳を手取ることに何ら問題はない。サージェント訳のような「平易」な訳も同じことで、それが歴代の英訳『土佐日記』のなかでやや特異な印象を与えるのは、何よりも読者に『土佐日記』の物語の展開と、そこから浮かび上がる全体的な主題を伝えることを目的としているからなのである。

#### 4 マイナーの「歌日記」観

マイナー訳『土佐日記』が発表されたのは1969年、*Japanese Poetic Diaries* と題した書籍の一部としてである。「日本の歌日記」という題のとおり、同書は『土佐日記』に加え、同じくマイナー訳による『和泉式部日記』、松尾芭蕉『奥の細道』、そして正岡子規『牡丹句録』を収録することで、一つの「ジャンル」の展開を追う。この点は『土佐日記』単体での翻訳であったハリス訳およびポーター訳、そしてより広範な文学史の一断片として提出されたサージェント訳とも異なる、マイナー訳の大きな特徴となっている。

アール・マイナー (Earl Miner, 1927-2004) は日本文学、とくに詩歌の専門家としてプリンストン大学で教鞭をとった。なかでもブラウアー (Robert Brower, 1923-1988) との共著である *Japanese Court Poetry* は、英語圏の古典研究者に広く読まれている一冊である<sup>[37]</sup>。またマイナーは近世英文学にも造形が深く、ミルトンやドライデンの権威でもあった。このように学際的な背景を持つマイナーが『土佐日記』を世界の文学のなかにどのように位置づけたかを知ることは、ひいては英語圏における『土佐日記』の受容を探るうえで重要であろう。

同書を編むに当たって、マイナーが小西甚一 (1915-2007) に監修を依頼していることも興味深い<sup>[38]</sup>。小西は中世文学の専門家として筑波大学に勤めたが、スタンフォード大学やプリンストン大学にも滞在し、現地の研究者や学生と共に日本文学と向き合うなかで、当時アメリカで隆盛していた分析的な文芸批評の方法論を取り込んだ独自の研究手法を築き上げ、その後の国文学や国語教育のあり方にも影響を与えている。いわば小西は、戦後の「望ましい」日本研究のあり方を体現した日本人の一人であり、その小西との協働で生まれたマイナーの著作もまた、「歌日記」をキーワードとした柔軟な文学史の展開という、それまでの日本文学研究とは一線を画す方法を採用したものである。

それではマイナーの言う「歌日記」とはどのようなものか。マイナーはまず、「歌日記 (poetic diary)」という用語は日本の学界で明確に定義されているわけではないものの、小西甚一や久松潜一 (1894-1976) によってすでに使用されていると述べる<sup>[39]</sup>。そして、その「歌日記」の第一号こそほかならぬ『土佐日記』であり、それは同時に、日本に「散文による虚構 (prose fiction)」が誕生した瞬間でもあるのだ<sup>[40]</sup>。なお、「歌日記」に似た用語として、日本では「日記文学」が定着しているが、これも近代以降の造語であり、まだ半世紀ほどしか使用されていないとマイナーは強調する<sup>[41]</sup>。つまり「歌日記」という概念をここで新たに提出することには、二つの利点があることになる。一つは、「日記文学」と呼ばれている一連のテクス

トを「歌を中心とする日記」と定義し直すことで、和歌という韻文から散文へと展開した日本文学の表現史により即した見方が可能になることであり、もう一つは、平安時代に閉じ込められている「日記文学」の概念を、近代にまで拡張できることである。従前の研究では、中世以降にも日記文学の伝統が継承されたという見方はされて来なかった<sup>[42]</sup>。

以上のような問題意識を提示したうえで、マイナーは日本における日記の独自性を論ずる。まず、広義での日記は、日本のみならず英語圏でも永い伝統を誇っており、日常的な習慣としても盛んである。例えばマシューズによる *British Diaries* には、十五世紀半ばから二十世紀半ばまでに書かれた、2500 以上の日記の記録がある<sup>[43]</sup>。しかし英文学史上に名高い日記は、往々にして公的なものである。最も有名なテキストの一つであるサミュエル・ピープスの『日記』(1660-1669)を見れば明らかのように、書き手の個人的な、人間的な姿によって精彩を加えつつも、日記そのものを特別たらしめているのはやはり書き手の社会的地位なのである。一方、日本の日記は律令社会において漢文で書かれた実用日記という、公の記録として出発している点では英国の場合に近いが、のちに日記文学と呼ばれ高い評価を得たのは、これとはまるで性格を異にする個人的な日記である。言い換えれば、英語圏の日記が、日本の当初の日記にも見られた、事実の報告としての、いわば journal (日誌) の語にふさわしい journalistic なものであったのに対し、日記文学と呼ばれるようになった日本の日記は、日々の営みの主観的な記録なのである。マイナーは、前者のようなものを public diary あるいは journal と呼び、後者のようなものを diurnal と呼んで区別している<sup>[44]</sup>。その差異は微妙なものではあるが、マイナー自身の言葉を借りれば次のように整理できる。

Japanese diary literature usually concerns love rather than marriage, death rather than participation in mortal battles, the family rather than public life.<sup>[45]</sup>

日本の日記文学は、結婚よりも恋愛を、決死の参戦よりも死そのものを、公的生活よりも家庭生活を、主題として取り上げるのである。

そして、以上のような性格を持つからこそ、仮に英語圏の日記が natural diary であるならば art diary と呼ばざるを得ないような、『土佐日記』を皮切りとする「虚構としての日記」が日本には生まれ、発展することになったのである<sup>[46]</sup>。ここで注意しなければならないが、「虚構としての日記」と言うからには、それは開き直った架空の日記というよりも、部分的にはあれ事実であることが装われている日記なのである。この虚実のわずかな境目、その曖昧さに、日本の日記文学の独自性があることにもなろう。とくに歌、すなわち詩というまぎれもない文芸的要素が盛り込まれることによって、日記はますます「ただの記録」から遠ざかるとマイナーは考える<sup>[47]</sup>。西洋文学においても、虚実のあわいをゆくという意味で、歌日記に近い性質をもったテキストが存在しないわけではない。例えば十八世紀の英国においては

書簡体小説の隆盛を皮切りに、文芸作品の形式が多様化している<sup>[48]</sup>。ただ日本においては、同様の展開が一千年近くも早く見出されるのである。

最後にマイナーは、日記文学というものは特別なものではなく、日本文学にとって存在して然るべき、なくてはならぬものであるという見方を示す。歴史上、『日記』という題を持つテキストが「物語」あるいは「集」と呼びならわされたり、反対に『物語』と銘打たれた作品が「日記」と呼ばれることもめずらしくないが、これは日記文学のつかみどころのなさを証拠立てるだけでなく、それが日本文学に偏在することの証左でもあるというのである<sup>[49]</sup>。

以上のように歌日記ならびに『土佐日記』の特徴を整理したうえで、マイナーは次のような点を提起して解説を擧筆する。

In some respects, the literary diary is indeed a more characteristic or peculiarly Japanese form than the anthology, because it answers to Japanese needs to know or to create the background of the poem.<sup>[50]</sup>

ある意味で、文学的な日記は和歌集よりも如実に、日本文学の特徴と言おうか、特異性が表れている形式であろう。なぜならそこには、詩の背景を知ろうとする、あるいはそれを創作しようとする日本人の欲求が現れているからである。

これは、古典文学が和歌を中心に発展してきたことを念頭においた見方であると共に、『土佐日記』の特徴を知悉してこそその指摘であろう。平安当時の読者にとっての『土佐日記』の面白さの一つは、自分たちにとって最も身近な表現である和歌が、架空の状況においてどのように詠み連ねられるのかということ、第三者の立場から鑑賞できる点にあった。歌集などにおいては、詞書のような補助的な情報も与えられるとはいえ、主眼はあくまで創作過程の成果物たる和歌の鑑賞にあった。それが『土佐日記』の登場によって、読者は創作過程そのものの仕組みに、より注目できるようになったのである。冒頭から書き手が登場し、その人物によっていわば生中継的に物語が書き進められてゆくというメタ的な構造は、『伊勢物語』のような既存の歌物語とも大きく異なっている。つまり日本文学においては、『土佐日記』によって初めて、「書かれた内容」ではなく「書くという行為」が焦点化されたと言えるわけである。マイナーによる解説は、この点にある程度まで踏み込んでいる点で高く評価できよう。

## 5 マッカラの「貫之礼賛」

現在最新の英訳『土佐日記』はヘレン・C・マッカラ (Helen Craig McCullough, 1918-1998) によるものである<sup>[51]</sup>。マッカラも同世代の多くのジャパノロジスト同様、開戦を受けて敵性語としての日本語を学び、戦後には通訳に従事するなどしたが、やがて研究の道に入っ

た。スタンフォード大学や母校であるカリフォルニア大学バークレー校で教鞭をとったマッカラは、一般的な知名度は低いものの、『太平記』『平家物語』『古今和歌集』『伊勢物語』など、膨大と言ってよい古典の英訳を成し遂げており、訳文の質も評価が高い<sup>[52]</sup>。

マッカラは英訳『土佐日記』を二度にわたり世に問うている。一度めは *Kokin Wakashū: The First Imperial Anthology of Japanese Poetry* の一部として、二度めは *Classical Japanese Prose: An Anthology* の一部としてである。とはいえ訳文の異同は限定的で、後者に細かなニュアンスを補うための若干の改訂が施された程度である。むしろ、ここではそれぞれの訳が収められている二冊の書物の性質の違いに注目したい。『土佐日記』がそれぞれの書物のなかでどのように提示されているのかを比較することで、マッカラによる『土佐日記』受容のあり方を検討することができると思われるからである。

一つめの英訳『土佐日記』を掲載した 1985 年刊の *Kokin Wakashū: The First Imperial Anthology of Japanese Poetry* は、標題のとおりあくまで『古今和歌集』の英訳を中心に据えた書物であるが、表紙には *With 'Tosa Nikki' and 'Shinsen Waka'* との添書きがあり、『土佐日記』と『新撰和歌』についても『古今和歌集』と同等に近い扱いとなっている。

上記のテキストが選ばれたことは、取りも直さず、同書が「貫之全集」とでも言うべきものであることを示唆していよう。紀貫之は『古今和歌集』の筆頭撰者として、一千首にあまる歌どもを編纂した日本初の勅撰和歌集に、さらに真名序と仮名序を付し、日本と日本語にとっての和歌の役割を説いた。そのような人物が書き上げた、仮名の日記という体裁をとる物語だからこそ、『土佐日記』は注目されたのであり、その意味では『土佐日記』は、『古今和歌集』の「続編」であると言っても決して誇張ではないのである。また、知名度では遙かに劣る『新撰和歌』は、940 年ごろ、すなわち『土佐日記』の数年後に、やはり貫之が編んだ私撰集である。『古今和歌集』の秀歌を中心に構成した 4 巻 360 首の和歌集には、「新撰和歌序」という漢文の序文もついている<sup>[53]</sup>。『古今和歌集』『土佐日記』『新撰和歌』は、まさに貫之の生涯を彩った三つのテキストなのである。

マッカラが冒頭に添えた前書きは非常に短いものだが、内容を選定した理由はそこに簡潔に記されている。

Like *Tosa nikki*, [...] *Shinsen waka* deserves attention because it sheds valuable light on Tsurayuki' s approach to poetry.<sup>[54]</sup>

『土佐日記』同様、(中略)『新撰和歌』が注目に値するのは、それが貫之の詩歌に対する姿勢を明らかにしてくれる点で貴重だからである。

つまりマッカラは『古今和歌集』の撰者である貫之を、日本の詩歌の伝統を語るうえで欠かせない存在と捉え、その貫之の業績をさらに深く理解するためには、『土佐日記』と『新

撰和歌』が重要であると考えたわけである。

これに加えて、マッカラによる英訳『土佐日記』が二度めに提出された状況を考え合わせると、『土佐日記』の多面的な性質はいよいよ明らかになるように思われる。というのもすでに見たように、その書物は *Classical Japanese Prose: An Anthology*、すなわち詩歌ではなく散文のアンソロジーと謳われているからだ。

『竹取物語』から幕を開け、『伊勢物語』『土佐日記』『枕草子』『栄花物語』『堤中納言物語』『源氏物語』『大鏡』『太平記』などを網羅する同書はまさに平安および鎌倉の散文の見本市といった様相を呈し、古典翻訳者としてのマッカラの集大成と言えるものである。大部分のテキストは抄訳であるが、すでに成っている訳稿の改訂版とはいえ、そのなかにあって『土佐日記』が全訳であることは、やはりマッカラが『土佐日記』を重要視したことを示唆しよう。

同書のなかで貫之は、マッカラが pioneering memoirist (先駆的な日記作者) と銘打つ著者たちの筆頭の地位を与えられている。以下の一文は、マッカラが貫之という存在をどのように捉えていたかを端的に示すだろう。

In his reliance on the poetic tradition for the expression of personal feeling, Tsurayuki pioneered a method that later memoirists were to follow and, in a few cases, to exploit brilliantly. The nikki proper, as opposed to the travel account, became almost exclusively the domain of women after *A Tosa Journal*.<sup>[55]</sup>

個人的な感情を詩歌の伝統に則って表現することによって、貫之はのちの日記作者たちが踏襲し、いくつかの場合には見事に換骨奪胎することになる方法を編み出したのである。日記という分野は、紀行文とは反対に、『土佐日記』以降、ほとんど完全に女性の領域となった。

『土佐日記』は日記文学と同時に紀行文学の嚆矢でもある。ということは貫之は、いわば女性的な散文ジャンルと男性的な散文ジャンルの双方の創生に大きく寄与した稀有な存在ということになるだろう。いや、詩歌の伝統を散文に接続したという点を重視するなら、貫之は仮名で書くこと、すなわち日本語で書くことの道を切り拓いた人物ということにもなる。マッカラによる英語圏への『土佐日記』の提出は、このように作者である貫之本人に積極的な意味づけを行なっている点でも評価できる。

またマッカラは *Kokin Wakashū* の姉妹編として、*Brocade by Night: 'Kokin Wakashū' and the Court Style in Japanese Classical Poetry* を同年に刊行しているが、これは前者で訳出された『古今和歌集』『新撰和歌』『土佐日記』の内容に詳細な分析を加えたもので、貫之とその業績について英語で著された研究書としては最も浩瀚なものと言ってよい。そこでマッカラは、『土佐日記』が重要なのはそれが「特定の詩歌について貫之が批評を加えている唯一のテキスト」

であるがゆえと要約する<sup>[56]</sup>。つまり貫之が詠んだ歌だけでなく、その歌について貫之が何を述べているのかを同時に鑑賞できることが『土佐日記』の特徴なのであり、それはそのまま、前段でマイナーの述べたような「歌日記」の重要性とも繋がってくるであろう。

## 6 おわりに

今日、日本について学ぼうとする海外の学生は、「地域研究」を専攻するのが一般的である。例えばハーバード大学が東アジア研究を志す学生に配布しているアカデミック・ライティングの手引きには、“East Asian Studies is not a discipline; it is a field of study” という文言がある<sup>[57]</sup>。日本語の感覚では、discipline も field of study も「学問領域」と訳することができるため、咄嗟には理解しにくい部分があるが、言い換えれば「東アジア研究」という一つの体系的な方法論のうえに組み立てられた「知的営為 = discipline」は存在せず、そこにはただ、様々な方法論に則って考究を展開すべき「原野 = field」が広がっている、ということなのである。文学であれ、歴史であれ、思想史であれ、東アジアという空間を舞台とするかぎりにおいて、その学問は「東アジア研究」たる資格を獲得する。してみれば東アジア研究は学際的なものとならざるを得ないのであり、これは現代においては取りも直さず、国際的であることが求められる、という意味にもなる。

日本の大学という場、さらにはそこで展開される研究という行為が、そもそも西洋から輸入された概念の具現化したものであることは、思いのほか意識されない事実である。すでに数十年にわたって学生たちに「国際化」や「グローバル」といった言葉を押し付けてきた一方で、教員の立場にある研究者は必ずしも海外の研究者との協働に積極的ではなかった。本稿で取り上げたような古典の研究は、国文学という領域に絡む思想的な背景や、文献学に偏重する傾向のある独特な手法からにじむ排他性もあいまって、とくに彼此の断絶が感じられることも多い。近年には、「美しい日本を描く」ような予定調和の日本研究がようやく過去のものとなりつつあり、「日本研究は日本人ものだけではない」という認識が共有されるようになったとする見方もあるが<sup>[58]</sup>、それでも「日本」という地域性が第一義的に設定されるかぎり、「日本研究」の真の国際化は遠いというのが実情ではないだろうか。

【付記】本研究は JSPS 科研費 (JP19K13150, JP20H01289) の助成を受けている。

### ▶注

[1] この問題については、例えばアン・ウォルソール「アメリカの明治維新史研究」(ダニエル・V・ボツマン、塚田孝、吉田伸之(編)『「明治一五〇年」で考える一近代移行期の社会と空間』山川出版、2018、184-205 頁)を参照。

[2] 「英語圏における『土佐日記』受容史の概略(戦前編) —アストンとハリスを中心に」『異文化』第 23 号、



- 2022、153-182 頁。
- [3] 鈴木健一『佐佐木信綱 本文の構築』岩波書店、2021、4 頁。
- [4] Aston, W. G. *History of Japanese Literature*, London: William Heinemann, 1899. 同書は 1908 年に芝野六助によって和訳され、大日本図書から刊行されているが、以下で話題になっているのは原書のほうである。
- [5] Aston, W. G. “An Ancient Japanese Classic: The ‘Tosa Nikki,’ or Tosa Diary,” in *Transactions of The Asiatic Society of Japan*. Vol. III, Part II. Yokohama: R. Meiklejohn & Co.; Kelly & Co, 1884. pp. 109-117.
- [6] 永井一孝『国文学史』早稲田大学出版部、1905、11 頁。漢字のみ新字に改めた。
- [7] 藤岡作太郎『近世絵画史』金港堂、1903、1 頁。
- [8] 陣野英則『藤岡作太郎「文明史」の構想』岩波書店、2021、42 頁。
- [9] 木下宏一『国文学とナショナリズム』三元社、2018、51 頁。
- [10] 「古典を楽しむ 私の日本文学」『ドナルド・キーン著作集』1 巻、新潮社、2011、297-299 頁。
- [11] “History of CJS,” *Center for Japanese Studies, University of Michigan*, <https://ii.umich.edu/cjs/history-of-cjs.html> (2022 年 12 月 11 日取得)
- [12] 垣内健「丸山慎男の「近代化」観の変容について—箱根会議の議論を中心に」(『比較社会文化研究』第 25 巻、2009、13-26 頁)、14 頁。
- [13] 会議の議事録は、丸山眞男文庫のウェブサイトで開催可能である。 <https://maruyamabunko.twcu.ac.jp/archives/search/bibliography/0401030000?sort=year&subpage=1&page=1&no1=401&no2=3> (2022 年 2 月 23 日取得)
- [14] Porter, William N. *The Tosa Diary*, London: Henry Frowde, 1912.
- [15] アストンによる講演 “An Ancient Japanese Classic” の議事録を指して抄訳と呼ぶこともできようが、講演はあくまで『土佐日記』の紹介が趣旨であり、本文は参考に供されているだけであるから、抄録といったほうが正確である。
- [16] Sargent, G. W. “Tosa Diary,” in Keene, Donald ed. *Anthology of Japanese Literature*, New York, NY: Grove Press, 1955, pp. 82-91.
- [17] “Sargent Collection,” *National Library of Australia*, <https://www.nla.gov.au/collections/guide-selected-collections/sargent-collection> (2022 年 8 月 25 日取得)
- [18] Sargent, G. W. *The Japanese Family Storehouse: or, The Millionaires’ Gospel Modernised*, Cambridge: Cambridge University Press, 1959.
- [19] Sargent, G. W. “Tosa Diary,” p. 85.
- [20] 『土佐日記』原文は新編日本古典文学全集版に拠る。
- [21] Sargent, “Tosa Diary,” p. 82.
- [22] Miner, Earl. *Japanese Poetic Diaries*, Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1969, p. 59.
- [23] Harris, Flora. *Tosa Nikki or the Log of a Japanese Journey*, Tokyo: Kyobunkwan, 1910, p. 2.
- [24] Porter, *The Tosa Diary*, p. 15.

- [25] Miner, *Japanese Poetic Diaries*, p. 59.
- [26] McCullough, Helen Craig. "A Tosa Journal," in *Kokin Wakashū: The First Imperial Anthology of Japanese Poetry*, Stanford, CA: Stanford University Press, 1985, p. 263.
- [27] Sargent, "Tosa Diary," pp. 82-83.
- [28] Harris, *Tosa Nikki or the Log of a Japanese Journey*, p. 3.
- [29] Porter, *The Tosa Diary*, p. 17.
- [30] Miner, *Japanese Poetic Diaries*, p. 60.
- [31] McCullough, *Kokin Wakashū*, p. 264.
- [32] なお、砂浜に足で文字を書くというこの場面は、「浜千鳥」という歌ことばを経由して、鳥の足跡に着想を得て文字が作られたという古代中国の伝説を想起させるものであるが、ここでは問題にしない。この解釈については拙著『紀貫之』（東京堂出版、2019）第七章を参照。
- [33] ただしポーター訳に付された注には一点過剰な解釈が見られる。それによれば、原文の「足は十（あしはとお）」が「足跡（あしあと）」の掛詞になっているので、footprint という訳語を選んだというのである。これは通説とは言い難く、そもそも「あしあと」という言葉の用例は平安時代にはない。
- [34] Sargent, "Tosa Diary," p. 83.
- [35] 平川祐弘『アーサー・ウェイリー「源氏物語」の翻訳者』白水社、2008。
- [36] ウルフ自身の意見は、『源氏物語』を読んで』（ウルフ、ヴァージニア『病むことについて』川本静子訳、みすず書房、2021 所収）を参照。
- [37] Brower, Robert H. and Miner, Earl. *Japanese Court Poetry*. Stanford, CA: Stanford University Press, 1961.
- [38] Miner, *Japanese Poetic Diaries*, p. xiv.
- [39] Miner, *Japanese Poetic Diaries*, p. vii. 久松もまた、国文学を研究領域としながら、海外の文学研究の動向に強い関心を持った人物であったことは想起しておいてよいだろう。この点については衣笠正晃「国文学者・久松潜一の出発点をめぐって」（『言語と文化』第 5 号、2008、186-202 頁）などを参照。
- [40] Miner, *Japanese Poetic Diaries*, p. ix.
- [41] Miner, *Japanese Poetic Diaries*, p. 8.
- [42] Miner, *Japanese Poetic Diaries*, p. xi.
- [43] Matthews, William. *British Diaries: An Annotated Bibliography of British Diaries Written Between 1442 and 1942*. Berkeley, CA: University of California Press, 1950.
- [44] Miner, *Japanese Poetic Diaries*, p. 4.
- [45] Miner, *Japanese Poetic Diaries*, p. 4.
- [46] Miner, *Japanese Poetic Diaries*, p. 6.
- [47] Miner, *Japanese Poetic Diaries*, p. 9.
- [48] Miner, *Japanese Poetic Diaries*, p. 11.
- [49] Miner, *Japanese Poetic Diaries*, p. 15.

- [50] Miner, *Japanese Poetic Diaries*, p. 53.
- [51] McCullough, Helen Craig. "A Tosa Journal," in *Classical Japanese Prose: An Anthology*, Stanford, CA: Stanford University Press, 1990.
- [52] Okada, Richard H. "Translation and Difference: A Review Article." *The Journal of Asian Studies*, vol. 47, no. 1, 1988, pp. 29-40, 29.
- [53] 『新撰和歌』とその序文については、拙著『紀貫之』の第二章を参照。
- [54] McCullough, *Kokin Wakashū*, p. v.
- [55] McCullough, *Classical Japanese Prose*, pp. 16-17.
- [56] McCullough, Helen Craig. *Brocade by Night: 'Kokin Wakashū' and the Court Style in Japanese Classical Poetry*. Stanford, CA: Stanford University Press, 1985, p. 497.
- [57] Radich, Michael. *A Student's Guide to Writing in East Asian Studies*. Department of East Asian Languages and Civilizations, Harvard University, p.7. [https://writingproject.fas.harvard.edu/files/hwp/files/writing\\_in\\_east\\_asian\\_studies.pdf](https://writingproject.fas.harvard.edu/files/hwp/files/writing_in_east_asian_studies.pdf) (2022年2月19日取得)
- [58] 岩淵令治「“日本研究”のコンテクスト」伊藤守幸、岩淵令治（編）『グローバル・ヒストリーと世界文学 日本研究の軌跡と展望』勉誠出版、2018、3頁。